

## はじめの一歩を自分の足で

園長 野中 泉

今年の夏は例年にも増して、仲間たちと沢山の研修に行かせてもらいました。鹿児島、群馬、岡山、島根、そして北海道と研修が集中し、8月は毎週末誰かが旅をしているそんな感じでした。研修では全国にアトム・つばさの実践報告をさせてもらう場面もありましたし、様々に興味深い保育実践がある園の視察をさせてもらったり、前理事長の市原からご縁が続いていた保育園と一緒に合同職員会議をするという貴重な体験もありました。また、保育園だけでなく地域全体で、子どもの育ちを支える施策を展開している市のフォーラム（教育委員会主催）に参加させてもらい、学校や公民館、NPO法人の方々のお話しを聞く等様々な視点からの学びが本当に盛沢山、実り多い夏でした。

外の風にふかれ、外の人たちから刺激をもらうことで、それまで知らなかった新しい視点が開かれるることはもちろんですが、外を見るからこそ、自分たちの内側（保育）をまた深く考えることもつながります。やはり、方向性は間違っていなかつたと励まされることも、逆に私たちの保育の甘さや中途半端さに気づかされ反省することも同じくらいありました。これから、またこの経験を仲間たちとしっかり受け止め、進んでいきたいと思っています。

下の2枚の写真は、つい先週いかせてもらった北海道恵庭市での研修の場面です。ある幼稚園が所有する森で行っ



ている自然体験のカリキュラム。またその森を園児だけでなく地域の財産として他団体の活動にも開放している取り組みについて現地を視察しながら聞いたのですが、その際に講師の方とのこんなやりとりが印象に残りました。写真はお父さんたちと作ったというツリーハウスです。2枚目の登っている人の動きでわかるとおり樹木に手足をかけて登れる木の補助具がついています。でも、はじめの一歩目の足をかけるところには補助具がなく、かなりがんばって足をあげ手の力でよじ登ってはじめの一歩目を踏み出す必要があります。

それはなぜですか？という参加者の質問に講師の方はこんなふうに答えました。「これは、とても大事にこだわっているところです。この森ではぼくたちは、ほとんど禁止事項を言いません。川でザリガニをとることも、ロープでブランコやターザンごっこをすることも、このツリーハウスに登ることも。でも、この一歩目を手助けして登らせてやることもしません。なぜなら自分でこの一歩目が登れない子を大人が抱き上げて登らせてやっても、その子は、その先の高いところで怖くなってしまったり、自分で降りてくることもできなくなるんです。自分が、ここに登れる力があるかどうかは、自分で知る。それが自分の身体を大きな怪我から守る大事なことです。だから、うちの園の子たちは、あきらめも上手ですよ。足をかけてみて、やっぱり、こんどにするって。登らせてって泣く子はほとんどいません」笑顔で話されたそのお話には、ほんとうに深く共感しました。そういうえば、北海道の前にお邪魔した島根県益田市で里山保育を展開している真砂保育園の園長先生も「木登りで大人が手伝って登らせてやることはしません。それは、子どもたちにとってほんとうの成功体験にはならないからです」とおっしゃっていたことを思い出します。

自分で考え、自分で決める。子どもたちが生活の主人公になる。アトムが大事にしてきた保育の大きな柱です。昨日のぞいたみかん組では、アトムフェスティバルで何をしたいかの話し合いがはじまっていました。「ちょっとぼく（私）には難しいこと。でも、やりたいこと」そんなお題を前に、これがしたい、こうしてみたいと次々に意見が出てくる子、反対にうへんと考え込む子いろいろでしたが、たまたま一緒に見学をしていた熊取町の教育委員会の方々が何より友だちの考える時間を持つて子どもたちの姿にずいぶんと驚いてくださったことも印象的でした。子ども自身のはじめの一歩をとりあげてしまうことなく、自分の足で踏み出す時間を保障する。そんな大人でありたいと、改めて思う夏です。